

「駅そば発祥の地」 余話

小川達朗（7組）

先日、「駅そば発祥の地」について HP 投稿させていただきましたが、信毎デジタルやネットに掲載されるまでには、上田高校同窓会に関わっていただいた方との繋がりが大きな助けとなりました。

私の住んでいる茅野市は、上田高校同窓会中南信支部に属していて、その会に出席した折に井上裕子さん（79 期、信濃毎日新聞社取締役：当時、㈱松本平タウン情報の常務取締役編集長）とお話させていただく機会がありました。

その際、母の実家（旧軽井沢、旧姓：山本）が深く関係してきた「幻の陶器 三笠焼」についての取材をお願いしたところ、直ちに本社の W 記者を紹介してもらい、三笠焼の取材をしていただくことが出来ました。W さんは北海道出身ですが、大学時代を信州で過ごしており、上田高校についてもよくご存じで、快く対応していただきました。

井上さんはその後、信毎の女性初の東京支社長に栄転、上原昇君（2 組）を経由して、関東同窓会会報「うえだ」100 号に大きく紹介されました。

三笠焼は、実業家の山本直良氏（明治 3 年～昭和 20 年）が軽井沢の避暑客への土産物のひとつとして、著名な陶芸家を招聘して生みだされました。

三笠に窯を構えたことから、三笠焼と称されました。

山本直良氏は、当時（明治 36 年）、避暑地軽井沢でのホテル需要を見込み、山本牛介（直良の菩提寺である品川の海晏寺の当時の住職の三男で母の父）を伴い、軽井沢の三笠地区を開発し、三笠ホテルを建造しました。（現在は軽井沢町が管理しています）作陶を指導した陶芸家のなかには、宮川香山氏、井高帰山氏、そして、バーナード・リーチ氏などの名前も見られます。

三笠焼はその特異性から一時期注目をあつめました。が、気候や経済的な問題もかかえ、その後の不況や戦時色の高まりによって次第に衰退していったようであり、「幻の陶器」と言われるのはその故だと思われます。

この三笠焼につきましては、W さんの尽力により、『「三笠焼」探しています 明治・大正期 旧三笠ホテル近くの窯で制作』という見出しの記事として、信濃毎日新聞（2018 年 11 月 2 日）に紹介されました。

取材を受けたのは当時まだ 96 歳で健在だった母であり、記事の中で、母は「軽井沢の歴史が失われるのはもったいない。多くの人に知ってほしい」と話しています。母は記事が掲載されてから 2 か月後に亡くなったので、良い供養になったと思います。

現在、所在が確認されている三笠焼は、軽井沢町教育委員会が中央公民館に展示しているものと、私どもが管理しているものだけです。個人の別荘や三笠焼に関係した方々の個人所有のものなどもあるのではと思います。（次ページ写真）

そのような繋がりができたことで、再び W さんに「駅そば発祥の地」についても取材をお願いしたところ、さっそく信毎佐久支社に繋いでいただき、この度の信毎デジタル等への掲載の運びとなりました。

「三笠焼」や「駅そば発祥の地」がこのように世の中に紹介されるに至る過程に上田高校の同窓生をはじめ関わっていただいた方の繋がりがあったことに改めて感謝する次第です。

因みに、本 HP に掲載については、昨年末、上田高校同窓生の親睦団体「松尾倶楽部」例会で、弟の亮夫（69 期）が同席した上原君に話題提供したことがきっかけとなりました。



小川君が所有している三笠焼コレクションの一部

（2026 年 1 月 12 日 記）

以上